付加価値創造 わが社の経営イノベーション 第7回

130年の歴史が物語る 繊細な紅色を紡ぐ技術と織りの融合

株式会社新田（山形県米沢市）

染物の原料となる草木などは数多くあるが、中でも染色が大変難しく、まったく同じ色を出すことができないと言われているのが紅花である。その紅花から非常に繊細な紅色を探求し、商品に具現化するのが、「株式会社 新田」（以下、新田）である。

紅花の栽培に始まり、染めから織りまで一貫して行うことで絹反物を作る。そして、紅花染めを米沢織に生かし、これまで数多くの国内の権威ある賞を受賞するなど、伝統工芸の分野で日本を代表する会社である。今回、お話を伺ったのは、代表取締役社長の新田英行氏と、息子である専務取締役の新田源太郎氏。創業から130年ほどの歴史背景や、新田ならではのこだわりなどについて、いろいろとお話を聞くことができた。

代表取締役
新田　英行 氏

■歴史背景　米沢伝来の米沢織と新田家

新田は、上杉神社からほど近い場所に、昔ながらの武家屋敷風のたたずまいを見せていた。いかにも歴史の重みを感じさせる雰囲気を醸し出す。

米沢では、江戸時代の初めには紅花の栽培が始まっていたようだが、それを繊維業としての産業にしたのが直江兼続と言われている。その後、米沢藩主となった上杉鷹山は、財政立て直しの一環として繊維・織物業を盛んにした。これが現在の米沢織の基盤となり、米沢織は200年を超える歴史を持つ。

新田邸　情緒ある雰囲気を醸し出す

新田家は武士の家系で、代々続いてきた機屋（はたや）である。創業は明治17年。上杉鷹山によって始められた米沢織を代々守り育ててきた。現在の社長の新田氏は４代目であるが、「３代目である私の父親が、海外から入ってきた化学染料に押されて日の目を見なかった紅花を蘇らせるべく、昭和30年代に紅花染めの研究に着手したことから始まり、試行錯誤の苦労の末、紅花染めを米沢織に生かすことに成功したんです」と新田社長は言う。

新田がなぜここまで紅花の染色にこだわったのか。社長は「紅花というと黄色のイメージがありますが、実は黄色と赤の色素の両方を持っています。そんな中、赤の色というのは大変特別なものなんです。赤は色素の中で１％も残有量がないため、大変珍重されてきました。染色に使う特別な赤の色というのは、紅花からしか採れないんです。たった１％の中からいかに赤を抽出し、そこから微妙に色素量を変え、桜色（薄いピンク）から韓紅（からくれない）の色を染色していきます。まさにそこをうちは長い歴史の中で培ってきたんですよ」と語ってくれた。

紅花が生み出す赤の
グラデーション

■一貫性が生み出す こだわりの色と風合い

織りを専門とする工房では、染色を分業するところが多い。そんな中、新田では染色から織りまで一貫して行っている。これには新田ならではの付加価値を生み出す仕掛けがあった。「まず、自社で染めと織りを一貫して行う狙いは、都度品質をチェックし、風合いを確認し、着る人を引き立てられる商品かどうか、見極めることにあります。そして、私たちでイメージした最終的な姿に近づけるために、糸や織りをどうするかなど、すべてを研究し実践していくことができるからなんです。中でも、特に気を使っているのは、色合いです。色というのは、その時の気候や染める時に使う染料の状態によっても、微妙に変わってきます。例えば、『光が当たって輝いている葉の緑色』を再現したい時、染め屋に外注すると色見本何番の緑、となってしまい、こちらが希望する色が出ないことが多いんです。その点、うちは一貫性の中で自家染色することで、出したい色を再現するために社員ととことん話し合い実現させる。このように、自家染色するようになった機屋は、米沢ではうちが初めてなんです」と社長は言う。すると専務の源太郎氏が「社員も色合い等のコンセプトをきちんと理解した上で仕事をしている。うちの社員は皆、同じベクトルで仕事をしているからこそ、できることなんです。そういう人間関係を常に築いていくようにしていますし、結果、社員皆でその商品を製作している、ということになります」と語ってくれた。

こうして、新田がこれまで携わってきた染色は何万通りにも及ぶ。そしてそれらは色見本として蓄積されてきた。これらはまさしく、新田の歴史そのものから作り上げられた独自の付加価値にほかならない。

■数々の受賞が物語る新田の技術力

新田家の歴史をひも解くと、品評会での受賞歴はとても多い。これは代々の機業に対する熱い想いと技術力の裏づけと言える。そんな中、近年代表する受賞歴を２例ほど紹介したい。

まずは、今年６月に日本染織作家展で新田社長が衆議院議長賞を受賞し、日本一に輝いた作品「紬織着物プリマヴェーラ（春）」。社長は「紬織着物を米沢の春をイメージして作成しました。テーマは『プリマヴェーラ』、イタリア語で春という意味です。米沢の重い冬を越して、芽吹き花が咲き、やっときた春の訪れ、という表現を色に託した作品です」と話してくれた。

日本染織作家展の優勝作品
紬織着物　プリマヴェーラ（春）

２例目は専務の源太郎氏の作品である。創業から130年に渡る歴史背景はやはり半端なものではなく、新田の機屋魂は専務源太郎氏にも脈々と受け継がれていた。専務は、全国日本伝統工芸展で新人賞を受賞したのである。これは人間国宝をも輩出する国内最高峰の工芸展で、新人賞を受賞したのは平成23年当時、日本でたった３名の快挙であった。

当時の作品制作の背景について専務は、「竹林をイメージした袴地です。袴は新田家先代が取り組んでいたもので、原点回帰の想いから作り方を変えてみたんです。テーマの『千尋草』とは竹の別名なんですよ。色は、単純に見えますが、実は100色は入っています。普通に目にした時に、100色使っていることが分からないところが重要で、単純ではない見え方がすごさなんです。そして、光が差し込む感じを金糸で表現しているんですよ」と話してくれた。

日本伝統工芸展の
新人賞受賞作品
米澤平袴「千尋草」

■伝統技術と表現力が新たな商品を生む

専務による新しい取り組みが、米沢以外の産地メーカーとのコラボレーションである。その一例として、国内では一大産地である京都丹後の業者とのコラボが挙げられる。『ちりめん』の生地は、新田では取り扱っていなかった分野であったが、京都で織った『着物襟』などを新田が染める。そして、これまでになかった新しい色合いの商品を生み出す。「他社のまねをして作るというよりは、お互いの名前と技術力を生かした方が相乗効果があって、より良い商品が生まれると思っています。これから新しいものにどんどん取り組んでいきます」と専務は語ってくれた。

■社長のこれからへの想い

「米沢ほど織物業がまとまっているところは世界でもありません。また、米沢織って縞（しま）模様が得意なんです。世界の有名デザイナーが着物や洋服などの枠にとらわれることなく、縞織を見に米沢に行こう、と思ってもらえるように、米沢を一大セクションにするのが私の夢なんです」と社長は熱い想いを語ってくれた。

（フィデア総合研究所　丹野竜太郎）

株式会社新田
代表取締役社長　新田　英行
山形県米沢市松が岬２－３－36
従業員数：21名（役員・パート含む）
業種：絹織物業　　自家染色と織りによる製造販売